

# 教育環境をいかに人間化するか

教育環境とは社会環境、家庭環境、情報環境など子どもを取りまくすべての環境をいう。それらが学校教育と調和的な連携を保ってこそ人間の教育ができるのではないだろうか。

日本学術振興会理事 木田 宏

木田 宏

## 生まれるときから人間の教育がはじまる

教育というと、先生が生徒を教えることと考える。しかし教育には、育てるという文字が使われているように、親が子どもを育てることも教育の基木である。そういう点から教育を問いただすと、人は人の子であり、人に育てられなければならない。人間にならない。

イジドでオオカミに育てられた男の子が死んだという新聞記事を読んだことがある。また、A・ゲゼルの「狼に育てられた子」という大変有名な事例にもあるように、人間に生まれても人に育てられなければ、人間に帰ってこないものである。人間は生まれるときから、人間としての生命体を持って母親の胎内に宿る。そして母親の胎内で生活している間に、五感をのぼし、五体も備わり、生まれたときは、立派な大人に発育する種を持って出てくる。それを、どのようにして育てるかというところから、人間の教育がはじまる。

このことについては、ソニーの井深さんが早くから、幼児教育の大切さを説かれていた。いまは胎児教育まで注目を浴びている。胎内にいる赤ん坊でさえも、母親の喜怒哀楽がわかる。母親が心配すると、赤ん坊

の心臓の鼓動まで速くなる。母親が音楽を聴くと、そのリズムに合わせて、おなかの赤ん坊まで手足を動かすという事例も報告されている。

胎児教育を含めて、赤ん坊は生まれてから三歳までの母親との交流が一番大事だといわれている。その間に体をのぼし、五感をのぼす。目が見えるというのは、母親が赤ん坊の目をみつめて刺激してやるからで、生まれてきた赤ん坊を二週間目隠ししておく、永久に視力は回復しないということである。

このように、赤ん坊のときから、人間としての機能を健全に育てることが基盤にないと、学校教育そのものが成り立たない。

教育で一番大事なことは、自分が何であるかがわかることであると説く宗教家の言葉がある。内に省みたとき、自分がわかる人間に育てることが教育の眼目である。人よりも多くの知識を身につけるとか、人よりも優れた技術をマスターすることだけが教育の目的ではない。人よりだけ多くのことを記憶しているといっても、最近ではコンピュータのほうが優れた記憶量を持っているから大したことではない。自分という人間が家庭や世の中やあるいは学校でどういう位置づけの人間であるかということがわかり、自分の生きざまがわかるといことが教育の一番

の眼目である。

次に大切なことは、教育とは基本的に一対一の関係にあるということである。先生と生徒の関係、親と子の関係がそれで、親や先生には子どもに対して先輩としての責任がある。子どもの面倒を見るべき責任が親や教師の側にあるけれども、その育て方は子どもの発達段階に応じて、その子が持っている生命力が大きくなるように気を配ることである。

ところが、いまの教育はある意味では栄養過多であり、栄養が偏っていたり、またある意味では知識過多であり、知識偏重のところがある。

### 人間は環境によって育てられる

人間の生命が、一人でのびていく力を持つためには、環境のあり方を考えなければならぬ。人は人の子であると同時に、人は環境の子である。自然環境は、大きな教育要素を持ち、人間の先天的な特性を育てているともいえる。エスキモーと日本人とアフリカの人々とは先天的に違う。赤道の南に住んでいる人とは違う。それは、意識してそうになっているのではないけれども、エスキモーはエスキモーなりの生活があり、アフリカの人はアフリカの生活ができるように育っている。このように人間はその誕生の歴史以来自然の環境によって、いつの間にか無意識のうちに鍛えられているものがある。そういう社会の感化力というか、人間は環境の子であるという要素を考えてみなければならない。

この環境は自然環境のほか文化環境があげられる。文化環境は、本能的には言葉の問題になる。日本人は日本語を使うことによって育つ。考える力も、意思伝達も日本語によっている。その意味で、私は言語教育は、最も基本的な大事なものとして考えなければならないと思う。

ところが、現在は言葉の環境が崩れて、言葉は言葉ではなく叫びになってしまっている。そういう環境を大人たちがつくっている。学校のなかで、先生方が言葉をきちんとしていく。敬語などはいらないというの

では困る。人に対する尊敬や愛情を言葉を通じて培うことを考えれば、言葉は環境の場における非常に大事な基本であるという意識を持たなければならぬ。

この言語環境のほかに文化環境として大事なことに、宗教があげられる。人間の力を超えたものを人間がどのように意識するか、また受けとめるかによって、世界の人たちがそれぞれの行動様式を持つ。宗教教育は、宗教的な環境がどのように培われていくかということが大事な要素になってくる。この環境は、国々の風俗であったり習慣であったりする。そういうなかから人間が形成していく社会環境にも目を向ける必要がある。学校は社会環境の一環であるともいえる。その学校の社会環境を、どのような健全なものにしていくかということに気を配らなければならない。一時期、社会環境は子どもにとってはよくないから、学校は社会から隔離し、学校のなかだけできちんとやっつけていこうという傾向があった。しかし、よく検討してみると社会の環境のほうが健全で、学校のなかの環境のほうが歪んでいるのではないか、というところから「学校教育は大丈夫か」という世論になってきた。教師の集団、教師と生徒の集団が一体になってつくりあげている学校という教育環境がどのように健全かという問題である。「いじめ」や「校内暴力」が起きるのは、その環境のつくり方に原因があるのではないか。

社会環境が悪いから、学校は社会と隔離して、健全な教育環境をつくらうとしたこれまでの努力はわからないではないが、日本の学校は日本の社会から外れ過ぎてはいないか、と思われるところがある。学校のなかで行われている人間関係という一つの環境が、どうもおかしいぞというのがいまの姿ではないか。

### 学校教育は環境の一部分

学校環境は、人間がつくる集団の場であり、その環境が持っている業

養素を子どもが吸って大きくなっていくものである。そこに含まれている栄養素が歪んでいるのがいまの学校の教育環境であるともいえる。

今日の学校が果たして社会環境とうまく関わっているだろうか。もちろん社会環境を全て良しとすることはできない。社会のなかにある情報環境として、テレビが家庭生活に浸透してきた影響は計り知れない。

いま国民全体で見ると、人々がうけとる情報量の六割近くはテレビによっている。ところが、学校から与えられる情報は、せいぜい一割程度のものである。いまや子どもたちはテレビづけになっているといってもいいのではない。

そういう情報環境が子どもにどのような影響を与えているか、あるいは子どもはそれらの情報環境から何を学んでいるかということを考えないで、学校の教育環境を整えることはできない。

子どもの情報環境としては、このテレビによるもののほかにパソコンとか、マイコンとかワープロなどの情報機器が市場に溢れ、社会のなかで行われている情報の流通のほうが、学校を追い越しているというのが現状である。学校はある意味では全く時代遅れになっている。

社会の進み方と学校のなかにおける行動様式にずれが生じていることを、学校は教育環境の今後のあり方について考慮しなければならぬ。

こう考えていくと、一体学校で教育するとは何かということになってくる。子どもたちは、急激に変化する社会環境のなかで、意識的にあるいは無意識のうちに大きくなっていく。そのなかで社会環境と調和的な連携を保ちつつ、学校ができることは何か、どうしたら人間的にプラスになるかということを考えていかなければならない。

ところが、明治以来、学校こそ教育であり、その環境が子どもの教育にとって至上のものであるという考え方から抜け切れないでいた。教育のことは学校にお任せくださいと、政府がいい、学校の先生もいってき

た。

学校経営とは、学校の環境をどのようにするかということであり、その環境が子どもの住んでいる社会環境と、どういうところで結びつき、子どもの発育のために健康な環境になっていなければならないかということに目標を据えることである。

子どもが社会環境からも栄養分を摂っていることは、無視できない。なかには、子どもの健全な発育を妨げるものもあるだろう。しかし、学校の教育環境よりもはるかに進んで優れた栄養分があるかもしれない。教室で先生が教えていることだけが教育で、環境はどうでもいいという学校では本当の人間を育てることはできない。世間では建物を立派にしたり、植木や草花を育てることだけに熱心な校長だと悪口をいう人もあるが、それが学校全体の環境づくりとして健全なものになり、地域の環境にも結びついてプラスするところがあるならば、それは素晴らしい環境教育実践の校長である。

### 教育環境は大人の責任で

いまの学校で問題の起こっているのを見ると、先生方の仲間意識が分裂して、その間隙をついて、校内暴力とか、いじめの悲劇が起こっている。そこから立ち直るためには、校長以下、全校体制で学校の教育環境を整えなければならない。校内の規則を整備することも必要かもしれないが、教師と生徒が一对一の温かな血の通った人間関係が生まれるような教育環境にすることが、もっと大切である。

荒れる中学校が立ち直った事例を見ると、校長はじめ全校の教師が気持ちを入れかえ、父兄にも呼びかけ、地域の人々にも協力を求めた事例が少なくない。

「あなた方もうちの学校の生徒に声をかけてください。前を通ったときに、おはようといってください」

校長も町に出ていって、うちの学校の生徒に何かあったら、遠慮なく

学校へいってきてください、迷惑をかけるかもしれないが学校と一緒に  
なつて生徒を見てやってください、と地域の人たちに呼びかけた。学校  
の立ち直りのきっかけは、地域ぐるみで環境の浄化に努めたからとい  
うのが多い。

環境というと、自然環境のようでもうにもならないもののように見え  
るが、そうではない。人間の環境は、人の努力によって良くも悪くもな  
る。その環境を立て直すことによって、教育を立て直すことができる。  
そしてまた、その教育によって新たな環境を作る人間が養われる。環境  
は素晴らしい人間によって良くしていくことができる。こうみえてくと  
教育とは、基本的には環境をつくつていく人間を育てる息の長い仕事で  
もあると考えられるのである。

教師や親を含めたわれわれ大人が健康な文化環境を持ち、言葉を正し  
礼儀を正しくする。校長に対して、「おい、こら」と呼ぶ教師のいるよ  
うな学校環境で、子どもにきちんとせよといつてもできるわけはない。  
まず大人の責任において、教育環境の浄化に努める。これが今日求めら  
れていると思う。

大人が環境をつくり、同時に環境をつくつていく人間を育てる努力が  
教育になければならない。そういう意味で、教育環境の人間化とは、国  
民一人ひとりの生活、家庭の生活、いろいろな地域の人の生活にも関わ  
ること、それらの環境を秩序づけ、健全なものにしていく。そこか  
ら、素晴らしい人間が生まれ素晴らしい人間がより良い次の環境をつ  
つていくのではないだろうか。